様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１８５１０

研究課題名（和文）出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後どっこ」にみるアジア近現代開発史研究

研究課題名（英文）Research on the history of modern and contemporary development in Japan and Asia, with a case study of the "Bungo Dokko" group of migrant tunnel miners

研究代表者
谷川　竜一（Tanigawa, Ryuichi）

金沢大学・新学術創成研究機構・准教授

研究者番号：１０３９６９１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、大分県・旧南海部郡（現・佐伯市周辺）の出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」の活動の解明を行った。研究を通じて、豊後土工の誕生メカニズムを佐伯市周辺の地域史と関係付けながら可能な限り科学的に解明できた点は大きな成果だった。また、豊後土工が植民地開発から戦後の高度成長下のビッグプロジェクトに関係してきた歴史を具体的に把握できた上、複数の論文や研究発表にまとめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在、当時を知る現場労働者としての豊後土工はごく僅かとなっており、この数年間がそうした人々の話を直接うかがう最後のチャンスであった。本研究はフィールドワークや高齢者へのインタビューなどを主要な研究手法としていたために、かなりの制限を受けた。しかしそれでも多くの重要な情報を集めることができ、近代日本の現場労働者たちの歴史と建設史を後世に残すことができた。そうした面で、土木史的な学術的意義と同時に、社会的意義を一定程度確保することができた。

研究成果の概要（英文）：Through this research, I have elucidated the activities of the "Bungo Dokko," a group of migrant tunnel miners in the former Minami Amabe County (now Saiki City and surrounding areas) of Oita Prefecture. It is a significant achievement that I was able to elucidate the mechanisms of the emergence of the "Bungo Dokko" as scientifically as possible while connecting it to the regional history of Saiki City and its surrounding areas. In addition, I was able to grasp in concrete terms the history of Bungo Dokko's involvement in major projects from colonial development to the postwar period of rapid economic growth, and was able to summarize this information in several papers and research presentations.

研究分野：建築史

キーワード：トンネル　植民地開発　豊後土工　戦後賠償　出稼ぎ　土木史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、日本の植民地開発史とその戦後史、および旧植民地の独立後の国家建設史を建築・土木の面から研究して来たが、水力発電所などの大規模プロジェクトを調査するなかで、「大分県佐伯のトンネル坑夫」という言葉が、断片的だが様々な工事記録で広範に出てくることに気づいた。そこで佐伯市を訪問し、試験調査を行ってみたところ、出稼ぎのトンネル専門坑夫集団「豊後土工（ぶんごどっこ）」の存在を確認し、高齢となった彼らが浦々で余生を送っていることを知った。

トンネル建設は 20 世紀に本格化したものであり、水力発電所（導水路部分）や鉄道、新幹線や高速道路、地下鉄などの社会基盤の基幹構造物の一つである。1920 年代以降、豊後土工は、日本の建設業に構造的に組み込まれ、植民地朝鮮や旧満洲の大型プロジェクト、戦後の黒部ダム、関門・青函トンネル、さらには東南アジア賠償工事を担ってグローバルに展開したというが、他方で生活拠点は旧南海部郡に置き続けた。19 世紀北米の鉄道建設やマレーシア錫鉱山開発を担った華人やインド人の移民労働者と比べると、豊後土工は数が少ないが、遠く離れた地域的拠点ごと近代的で高度な建設労働に最適化した点で特異であった。そんな彼らは、長く故郷に大金を送り続けながらも、工事の機械化とともに 1980 年代以降激減し、多くはじん肺を患いながら、今世紀初めに姿を消した。

以上は、研究計画立案時の下調べで構築した仮説的な見通しとその背景であり、この見通しに沿いながら調査・研究を展開することで、枠組みに具体的な内容を加えることができるのではないかと期待し、本計画を研究代表者は立案した。また、本研究は特定の地域に根ざしたトンネル坑夫という現場労働者の歴史であり、比較的高位の技術者や構造物を中心として既存の土木史に対して、別の視点から新たな内容や価値を加えていく可能性も持ちうると考えた。加えて、旧南海部郡の浦々で暮らしている豊後土工は多くがかなり高齢であり、早急な聞き取り調査の必要があった。

このような背景、経緯より、豊後土工に関する早急かつ徹底した調査・研究が必要と考え、本研究を立案し、開始に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本・アジアの近代化において極めて重要な役割を果たしたにもかかわらず、これまで知られてこなかった、大分県・旧南海部郡（現・佐伯市周辺）の出稼ぎトンネル専門坑夫集団である豊後土工の活動を明らかにすることである。そして豊後土工の拠点であった旧南海部郡地域の変容と合わせて分析することで、郷土史からアジアのグローバル・ヒストリーを展望しうる統合的視座を模索するとともに、多くの地域・歴史の文脈に開かれた日本・アジア近現代開発史の構築に繋げていくことを目的とした。

この大目的のなかで、特に注目した点は、豊後土工の地縁・血縁的なネットワークとしての姿である。夫婦や仲間同士で出稼ぎに出向き、強い信頼関係で危険な仕事にあたり、子や親のいる故郷に送金する豊後土工の姿からは、旧南海部郡の環境や地域社会との強い繋がりが見てとれた。故郷である旧南海部郡は開発労働力を提供した後背地というより、いわばトンネル工事に特化した労働・地域の「建設共同体」ないし「建設協働体」だったのではないか。そしてそれは細かく伸縮しながら国内外の様々な開発に対応・機能したのではないかと考えられた。

そこで本研究では、次の三つの目的を設定した。

1）　豊後土工の活動を、彼らの海外展開にも注目しつつ、具体的に明らかにすること。
2）　労働の現場から遠く離れた故郷の社会環境やその生活景観と、出稼ぎの相関を解明すること。
3）　最終的には、植民地開発や高度成長下の開発に呼応して成立した豊後土工を、地域を単位・基盤とした建設共同体として分析し、その視点から日本を含むアジアのグローバルな開発史を構築すること。

３．研究の方法

以上の目的を前提とし、それに向けて必要な作業を、(Ⅰ)豊後土工の国内外における活動の具体的解明、(Ⅱ)大分県旧南海部郡の地域変容史の解明、(Ⅲ) 研究の統合――「建設共同体」としての豊後土工の歴史の構築、の 3 フェーズに分けて遂行することとした。主要な調査手法は主に、インタビュー、文献調査、フィールドワークとした。

上記(Ⅰ)では、豊後土工本人や遺族へのインタビューを通じて、豊後土工の国内の主要工事や、戦前の植民地や戦後の東南アジアなどにおける工事に対する理解と考察を深めることを目的とした。また、豊後土工だけでなく、建設工事の「元請け」「下請け」ヒエラルキーを重視し、彼らを雇う側となった建設会社やコンサルタント、高位の技術者らとの関係を、社史や技術史文献、あるいは技術者の個人史資料などの考察から迫ることとした。さらに、豊後土工が海外の工事へと向かうことになった理由や、現地でともに働き「指導」した現地のトンネル坑夫たち（インドネシア人ほか）の情報、加えて建設地点の地域事情なども可能な限り集め、包括的に考察するこ

とを目標とした。これにより、国際的な文脈や現地の社会的な観点から、日本のアジア開発の意義を検討できると考えた。この最後の点については、東南アジア政治経済史や地域研究を専門分野とする京都大学・東南アジア地域研究研究所やジェトロ・アジア経済研究所の研究者らに、分担・連携研究者として本研究に参画してもらい、多角的な分析を進めることとした。

(Ⅱ)では、豊後土工が大分県旧南海部郡と強い繋がりを持って仕事を行ったその歴史社会的理由や構造に、郷土資料の丁寧な収集や地域生活環境の観察、そして住民の方々への聞き書きからアプローチすることとした。リアス式海岸の各集落の農業形態の変遷、食生活、漁業の変遷などがキーポイントになると思われた。

そして(Ⅲ) では、Ⅰ、Ⅱの調査・研究成果を合わせ、地域における建設共同体の形成を分析し、理論化することを目指した。複数の論文を執筆するとともに、研究成果を学術分野だけでなく、大分県旧南海部郡の地域社会へと還元することを計画し、研究期間後半に現地で地域住民向けのシンポジウムを開催することを計画した。

以上の計画と方法を元に、具体的な調査としては、大まかではあるが、研究期間前半に旧南海部郡一帯を広くフィールドワークするとともに、研究期間後半に、海外調査――特にインドネシア等――を進めることとした（もちろん可能な時期に適宜調査に出たので、この点はあくまで目安であった)。さらに、インタビュー内で出てくる重要プロジェクトの現地調査の計画も立て、随時実行した。

４．研究成果

上記の方法に沿って研究を始めた。主な作業とそれによる成果などを列記すると以下の通りである。

・　旧南海部郡一帯およびさらにその周辺

現在の佐伯市の海岸部にあたる上浦、鶴見、米水津、蒲江などを中心に、各集落の中心にある図書館の分室などで資料を収集した。現在の図書館検索システムでは引っかからないような、郷土史家や高校の教員、地域の商工会議所や歴史を調べることが好きだという住民の方々の出版物や資料が所蔵されており、それらが本研究には大変有効であった。余談ではあるが、歴史を大切にした戦後日本の一人ひとりの知的かつ創造的営為の重要性やその意義を、再確認した次第である。

加えて、研究途中から関心を絞っていった炭鉱夫や石工たち（彼らは豊後土工の誕生に関与したと考えられる）の情報についても、資料や住民へのインタビューなどで多く収集することができた。

また、旧南海部郡と隣接する旧北海部郡の海岸部や、あるいは宮崎県・延岡市方面にも調査域を広げ、フィールドワークを試みた。それにより、旧南海部郡だけでなく、その周辺地帯からも豊後土工は一部生まれており、それはリアス式海岸が途切れるところでぷっつりと途切れた。こうした点からも豊後土工が地域の自然や生活環境と強く関係があることを調査中盤ではっきりと確認できた。

・　旧南海部郡やそれ以外の地域で暮らす豊後土工およびその遺族・末裔の方々へのインタビュー

旧南海部郡一帯では、ほぼすべての集落を回り、話を聞ける方を見つけてはインタビューを行うという手法を採った。「最末端」の坑夫ではなく、親方レベルの坑夫からは非常に有意義な話をしばしば聞くこととなった。他方で、こうした方法でアプローチしていくとどうしても集まってくる話は散漫となり、さらには被調査者が工事に参加していても記憶が曖昧だったり、体系だった話が聞けなかったりして、断片的な話の集積となる傾向があった。こうしたなかで、調査途中でインドネシア賠償に参加した坑夫たちのリストを手に入れることができ、記載された坑夫やその遺族一人ひとりを尋ね歩くことで、賠償工事に関する情報については、かなり充実した成果を得た。

調査終盤にコロナ禍により海外調査が不可能になったが、国内はかなりの制限のなかでも一部現地調査を進めることができた。結果、豊後の地から外に出て行き、日本国内の各所に「土着化」した豊後土工やその遺族の方々にアプローチし、重要な情報も収集することができた。特にいくつかの建設会社は、バブル期以後の日本の建設産業の混乱と再編のなかで、豊後土工の末裔であるというアイデンティティを保ちながら、日本各地でトンネルの建設、あるいは補修・整備に今も関わっていることがわかった。そうした方々から話をうかがうことで、豊後土工たちが「土着化」していく歴史的プロセス――それは往々にして高度経済成長下であった――についても考察を深めることができた。

・　国内のトンネルおよびその周辺調査

豊後土工へのインタビューを繰り返すなかで、豊後土工ないしそれに準じる坑夫たちが、大正期の丹那トンネル工事から黒部川の水力発電開発、戦時下の関門鉄道・国道トンネル、そして北陸トンネルや黒四、そして青函トンネルなどに深く関わっていたことがわかった。こうした各プロジェクトはいずれも日本近代史上の最重要プロジェクトだが、本研究ではなかでも関門トンネルや青函トンネルに注目し、門司・下関、津軽・函館などで踏み込んだ調査を行った。関門ト

ンネルでは地元新聞を集中的に集め、下関や門司を跨いだ地域の近代化との関係で、その建設の社会史的意義を探るとともに、担当した坑夫たちの情報を収集した。また、青函トンネルでは、現地出身の労働者たちが、日ソ間の問題や 200 海里などの国際関係の影響を受けて衰微する北洋漁業の現場から、青函トンネルの建設現場へ合流してくる様子を理解できた。

・　海外調査

インドネシアで海外調査を行った。豊後土工は戦前の植民地開発に参加していたが、戦後彼らがどのように技術を継承し、再び海外へ出て行くのかは謎だった。これについて、上記の文献調査やインタビューを通じて理解を深めるとともに、一部プロジェクトについて現地を訪問し、フィールドワークを行った。特にネヤマトンネルやカランカテスダムなどのブランタス河の開発に関して豊後土工は深く関与しており、現地調査を進めるなかで、計画の総合性とその中での豊後土工たちの役割を理解することができた。調査期間を延長し、さらなる現地調査を計画してインドネシアに 2020 年 2 月より渡航したが、具体的作業を進める前にコロナ禍によって調査を打ち切らざるを得なかった。これ以降、大幅に調査計画を修正した（この後、国内研究に重心をシフト）。

・　その他文献資料調査など

建設会社の各社史やアーカイブ中の資料、建設工事誌、写真集や新聞資料などを収集することができた。また、海外建設協会などでも、研究協力者らと共同し、集中的に資料を収集することができた。さらに、鹿島建設などの建設会社や日本工営の OB などにもインタビューを行い、豊後土工と関係をもった技術者や施工会社について情報を得ることができた。

・　豊後土工に関する歴史セミナーの地元開催

2019 年 10 月に、本科研費研究と佐伯市歴史資料館と共催で、佐伯市の郷土史研究団体である「佐伯史談会」の強力なバックアップの下で、歴史セミナーを佐伯市資料館で開催することができた。セミナーでは、「豊後土工とアジア」と題して豊後土工のアジア開発を、技術的な側面と旧南海部郡（現・佐伯市）の地域性を合わせて代表者が議論する一方で、日本の対アジア賠償や ODA 事業の背景史を分担者が発表した。セミナーは佐伯史談会の会員を中心に、会場一杯に参加者が集まり、盛況となった。

本研究を通じて、大分県・旧南海部郡（現・佐伯市周辺）の出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」の活動の解明を行った。研究を通じて、豊後土工の誕生メカニズムを佐伯市周辺の地域史と関係付けながら可能な限り科学的に解明できた点は大きな成果だった。また、豊後土工が植民地開発から戦後の高度成長下のビッグプロジェクトに関係してきた歴史を具体的に把握できた上、複数の論文や研究発表にまとめることができた。

現在、当時を知る現場労働者としての豊後土工はごく僅かとなっており、この数年間はそうした人々の話を直接うかがう最後のチャンスであった。本研究はフィールドワークや高齢者へのインタビューを主要な研究手法としていたために、コロナ禍においてかなりの制限や自粛をせざるを得なかった。しかしそれでもこの最後のタイミングでぎりぎり調査を行うことができ、多くの重要な情報を集めることができた。技術者や大会社が語る歴史とは別の歴史の見方を、豊後土工をテーマとすることで獲得できたと考える。ただし、資料には残りにくい近代日本のトンネル建設現場における労働者たちの歩みを記録し、彼ら・彼女らを大分の「辺境」の地の生活史と結びつけながら、グローバルな建設動態と合わせて歴史化するという試みは、個々の論文レベルで表現するのは難しかった。今後、書籍化などを通じてそれに挑戦していきたい。

本研究はコロナ禍において予期せぬ軌道修正などを迫られたが、豊後土工たちの活動の枠組みとその具体的内容の重要部分については理解を進めることができた。繰り返すが、研究期間は 2022 年度で終了したが、最終年度での収穫・考察なども含め、今後も研究成果を発信していく予定である。

最後に本研究は、佐伯市およびその周辺の豊後土工の方々、およびそのご遺族の皆様の支援の下で進めることができました。協力してくださった一人ひとりの具体的なお名前は、非常に数が多くなるのでここで挙げることはできませんが、感謝の言葉を記しておきたく思います。また、全国各地で今もなおトンネル建設・補修整備事業に関わっておられる現役の豊後土工の方々のご協力にも心より御礼を申し上げます。さらに、トンネル工事に限らず、様々な建設関連業務をなされている皆様のお力添えも頂きました。特に研究期間後半においては、日本トンネル専門工事業協会のご協力により、複数の重要なインタビューを行うことができました。深甚なる感謝を申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 谷川竜一	４．巻 42
２．論文標題 豊後土工の誕生――炭鉱夫・石工からトンネル坑夫へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 土木史研究講演集	６．最初と最後の頁 111-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一	４．巻 41
２．論文標題 日豊本線のトンネル建設工事と南・北海部郡の地域社会　―豊後土工成立前夜の建設労働者たち―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 土木史研究講演集	６．最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一	４．巻 237
２．論文標題 豊後土工と芋	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佐伯史談	６．最初と最後の頁 15-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一	４．巻 vol.38
２．論文標題 出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」と日本の植民地開発	５．発行年 2018年
３．雑誌名 土木史研究講演集	６．最初と最後の頁 347～354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長田紀之	4．巻 47
2．論文標題 日本の東南アジア史研究（2006-17）―重層する地域、近代性批判、歴 史語り―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東南アジア―歴史と文化―	6．最初と最後の頁 50~67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷川竜一	4．巻 16
2．論文標題 1950 年代のバルーチャン水力発電所建設とビルマ人技術者	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人間学研究	6．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 谷川竜一
2．発表標題 豊後土工の誕生――炭鉱夫・石工からトンネル坑夫へ
3．学会等名 土木学会、第42回土木史研究発表会
4．発表年 2022年

1．発表者名 谷川竜一
2．発表標題 豊後土工の成立とその後の展開
3．学会等名 豊後土工に関する講演会
4．発表年 2022年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 豊後土工の誕生――炭鉱夫・石工をトンネル坑夫へと変えた大正期・日豊本線工事――
３．学会等名 新図集研研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 日豊本線のトンネル建設工事と南・北海部郡の地域社会――豊後土工成立前夜の建設労働者たち――
３．学会等名 土木学会、第41回土木史研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 Infrastructure as Historical and Cultural Heritage: The Nejama Tunnel in East Java and its Historical Context
３．学会等名 "Ethic, Aesthetic, and Heritage: the role of tangible and intangible heritage in the Asia-Pacific region", Queensland University of Technology, etc..（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」と戦後賠償・開発援助――再編される日本植民地開発の経験と人脈
３．学会等名 戦後空間WGシンポジウム05「賠償・援助・振興――戦後空間のアジア」日本建築学会戦後空間WG主催（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 豊後土工とアジア
３．学会等名 第４回『郷土の歴史教室』
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡本正明
２．発表標題 日本のアジア復帰と戦後賠償： 経済的先兵としての豊後どっこ？
３．学会等名 第４回『郷土の歴史教室』
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」と日本の植民地開発
３．学会等名 土木学会、第38回土木史研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 バルーチャン水力発電所とビルマ人技術者
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡本　正明 (OKAMOTO MASAAKI) (90372549)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授 (14301)	研究期間の延長と、担当箇所の研究完了にともない、途中で分担者からは外れて頂くこととなった。

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	長田　紀之 (OSADA NORIYUKI) (70717925)	日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター動向分析グループ・研究員 (82512)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
越境する文化遺産	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関